

< 研究報告 >

看護基礎教育課程における看護学生の
手術室看護実習に関する研究の動向と課題
—2000～2015年に発表された国内研究に焦点をあてて—

小澤尚子
岩手県立大学看護学部

要旨

【目的】国内の看護基礎教育課程における看護学生の手術室看護実習に関する看護研究の動向を分析し、今後必要とされる研究について検討する。

【方法】『医学中央雑誌 Web 版』を用いて 2000～2015 年に発表された看護学生の手術室看護実習に関連する論文を対象とした。研究の種類等は記述統計量を算出し、「研究内容」および「学生が経験した手術室看護実習の様相」については、意味内容の類似性に着目して分類した。

【結果】該当した 43 論文のうち、研究デザインは因子探索研究が 55.8%、種類は質的研究が 55.8%と最も多くを占めていた。手術室看護実習の指導状況は「指導者による指導」が 55.8%と最も多く、「研究内容」は 5 分類され『手術室看護実習における学生の学習内容の実態』が 58.1%と最も多かった。「学生が経験した手術室看護実習の様相」は 4 分類され、そのうち【学生が手術室看護実習を目標達成する過程で経験した困難と達成感】では、学生が手術室看護実習の目標を達成する過程で経験した困難や達成感や、指導に対する肯定的・否定的な捉え方が示された。

【結論】現在の看護学生の手術室看護実習に関する研究の動向は、手術看護実習の実態が明らかになってきた萌芽的な段階にある。今後の課題として、①学生のストレスを軽減する教授法や援助、②実習担当教員の教授活動の解明、③教員と指導者側の支援・連携に着目した研究を行う必要がある。

キーワード：看護基礎教育課程，手術室看護実習，文献検討

はじめに

周手術期看護とは、「手術患者の入院から退院までの期間に、患者に提供される看護ケア」と定義¹⁾されていることから、手術前、手術中、手術後の全期間を通して一貫した看護を提供することを意味する。そのため、周手術期看護において手術中の情報は、手術後の看護を提供するうえで欠かせないものである。看護基礎教育の周手術期実習における手術見学は、患者が手術によって受ける侵襲の理解や、

術後の回復を考えて援助していくうえでも、看護学生（以下、学生）が経験すべき重要な臨地実習（以下、実習）である。看護基礎教育における手術室看護実習の研究はさまざま報告されているが、その教育内容についても個々の報告に留まっている^{2)～5)}のが現状である。しかも、これまで国内の看護基礎教育における手術室看護実習の動向を分析したものは、文献の表題をデータとしてテキストマイニング分析した研究 1 件⁶⁾のみであった。その先行論文

の検討内容は、卒後の手術看護教育分野である認定看護師にもふれるなど幅広く手術看護を分析しており、看護基礎教育における学生が手術室看護実習で経験した内容までは詳細に分析されていなかった。そこで、看護基礎教育における手術室看護実習に関する論文を分析し、手術室看護実習の学生の学びや思い、傾向、実習の内容などを整理することで、手術室看護実習の課題が見出せると考えた。

以上より、本研究ではわが国の看護基礎教育における学生の手術室看護実習に関する研究の動向を明らかにし、今後必要とされる研究について検討することを目的に研究を行った。

研究方法

1. 用語の定義

1) 看護基礎教育課程

保健師助産師看護師法により、看護師の国家資格の国家資格を満たす教育内容による学校教育で、教育内容は保健師助産師看護師学校養成所指定規則に定められている⁷⁾課程に在籍する学生。

2) 手術室看護実習

看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基に、クライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を修得するという学習目標達成を旨とする授業⁸⁾である。本研究における手術室看護実習とは、学生が手術室において学習目標達成を旨とする実習とする。なお、手術室看護実習には二つの形態があり、本研究では、受け持ち患者の手術室入退室に合わせ、学生も患者とともに行動する実習を「受け持ち実習」、手術室看護師とともに行動し手術室看護業務を見学または実施する実習を「手術室実習」とする。

3) 指導者

平成27年度の『看護師等養成所の運営に関する指導要領』のなかで、実習指導者以外の指導にかかわる看護師を学生の指導を担当できる看護師⁹⁾と表現していることをふまえて、本研究では、手術室看護実習において学生指導を行う臨地実習指導者および外回り看護師を含めて、指導者とする。

2. 研究対象

看護基礎教育における手術室看護実習に関する論

文について、2000年1月～2015年12月の間に日本国内で発表された論文を対象とした（最終検索2015年12月21日）。研究論文の検索は、『医学中央雑誌 Web版 (ver.5)』（特定非営利活動法人医学中央雑誌刊行会）を用いた。「手術室」「学生」「看護」「臨地実習」をキーワードとして検索し、原則として原著論文とした。次に、抽出した論文から「急性期看護実習全般」が対象でデータが混在し手術室看護実習の特徴を把握し難い論文、准看護師養成所を対象としている論文、手術室看護師を対象としている論文、施設看護部内における教育的研究、看護教育機関ではない（医学、薬学、理学教育など）論文、文献検討をしている論文を除外した。

3. 分析方法

1) データ化

対象とした論文の分析項目は、「研究の年次推移」、「研究対象」、「筆頭研究者」、「研究の種類」、「研究デザイン」、「データ収集方法」、「手術室看護実習の目標」、「手術室看護実習の形態」、「手術室看護実習の指導状況」、「手術室看護実習の期間」、「学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容」、「学生が経験した手術室看護実習の様相」である。「学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容」は、論文を精読し内容を要約した。また「学生が経験した手術室看護実習の様相」は、対象とした論文の結果から、学生が経験した手術室看護実習に関する記述部分を抽出し、記録単位を作成した。その際、独自の質問票や、既存の尺度等を用いた量的研究は、看護基礎教育における手術室看護実習の傾向を割合で示したものであることから、コード化が困難であると判断したため除外し、最終的に質量併用論文の質的研究の部分と、質的研究の論文を分析対象にした。なお、一つの論文あたりから抽出される記録単位数に制限はしなかった。

2) データ分析

「学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容」および「学生が経験した手術室看護実習の様相」以外の項目についてはExcel2013に入力し、記述統計を算出した。「学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容の分類」は、論文を精読して内容を1文献につき1つに要約したものをコード化し、類似性のあるコードごとに分類してカテゴリ化した。「学生が経験した手術室看

「看護実習の様相」については、その内容を表している記述部分を、1文脈1単位として抽出した。文章に複数の内容が記述されている場合は分割し、複数の記録単位にした。次に、得られた記録単位を、意味内容に沿って忠実に分類・統合し、コードを作成した。その後、意味内容の類似性に基づきコードを分類・統合し、サブカテゴリを命名した。更に、同様の手順でカテゴリを命名した。分析過程においては、分析結果とデータ間の帰納的演繹作業を何度も繰り返し、信頼性の確保に努めた。論文の使用にあたっては出典を明らかにし、研究内容は正確に読み取り分析を行い、著者の意図を侵害しないように配慮した。『医学中央雑誌 Web 版 (ver.5)』を用いた検索は、2015年1月20日、9月25日、12月21日の計3回行い、その都度分析し、研究内容の確認をくり返すことで信頼性を高めた。

結果

1. 対象論文および研究の年次推移

看護基礎教育における手術室看護実習に関する論文について、2000年1月～2015年12月までに『医学中央雑誌 Web 版 (ver.5)』に掲載された、「手術室」「学生」「看護」「臨床実習」をキーワードに設定し検索した結果、原著論文では64論文がヒットした。この64論文を精読し、前述の研究対象条件で論文を除外したところ、最終的に43論文が対象となった。その対象論文一覧を表1に示し、表中の

番号は論文番号(1～43)とした(表1)。年次推移で論文数が最も多かったのは2012年の8論文であり、2009年から僅かに論文数は増加傾向にあった(図1)。

2. 研究対象

研究対象は、看護系大学の学生23論文(53.5%)、看護系短期大学の学生15論文(34.9%)、看護師養成所3年課程の学生2論文(4.7%)、手術室看護師と看護系大学の学生3論文(7.0%)であった(表2)。

3. 筆頭研究者

筆頭研究者の割合は、看護系大学教員が24論文(55.8%)と最も多く、順に看護系短期大学教員が13論文(30.2%)、手術室看護師が4論文(9.3%)、看護専門学校教員が2論文(4.7%)であった(表2)。

4. 研究の種類、研究デザインおよびデータ収集方法

研究の種類は、質的研究が24論文(55.8%)、量的研究が14論文(32.6%)、質量併用が5論文(11.6%)であった。また、研究デザインは、因子探索研究が24論文(55.8%)、関係探索研究が19論文(44.2%)であり、関連検証研究および因果仮説検証研究はなかった。

データ収集方法(重複集計)は、実習記録およびレポートを用いたものが21論文(38.9%)、独自の質問票15論文(27.8%)、面接調査が5論文(9.3%)、質問票の自由記載を分析したもの4論文

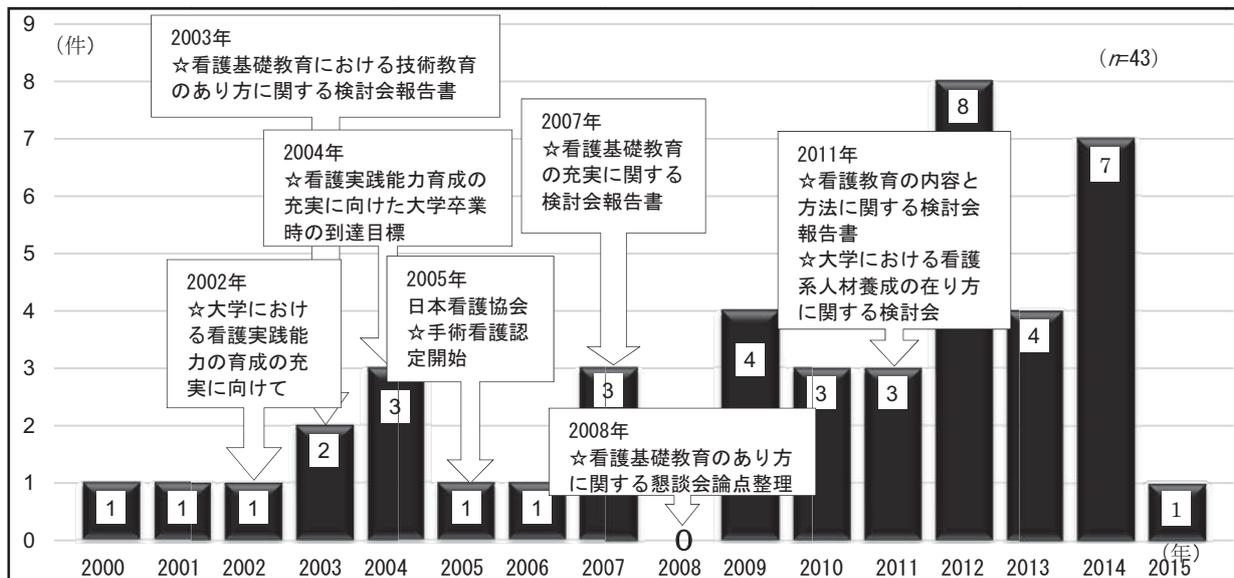


図1. 論文数の年次推移

表 1. 対象論文一覧

n=43

論文番号	著者*	題 名	出典名、巻(号)、頁、年
● 1	滝麻衣	臨床看護学実習Ⅰ(急性期・周術期)における手術室見学実習の実態調査	聖マリア学院大学紀要, 6, 67~70, 2015
● 2	佐野なつめ	手術室実習における看護学生の学びの現状 手術室実習記録による分析	東京厚生年金看護専門学校紀要, 16 (1), 20~28, 2014
● 3	木村美津子	成人看護学実習における手術見学学生への学習内容提示による学習効果	神奈川歯科大学短期大学部紀要, 1, 25~31, 2014
4	大滝周	看護学生の手術室見学実習を効果的に実施するための教育的試み(第2報)	昭和大学保健医療学雑誌, 12, 28~36, 2014
5	深澤佳代子	看護基礎教育における手術看護実習の意義 実習終了後の調査結果からの検討	日本手術医学会誌, 35 (4), 360~363, 2014
● 6	河相てる美	成人看護学実習における手術室実習での学生の学び 手術室実習記録の分析からの考察	共創館誌, 9 (1), 1~15, 2014
7	藤巻承子	看護学部生に対する手術室実習の意義と効果	日本看護学会論文集:成人看護Ⅰ, 44, 193~196, 2014
8	高橋甲枝	成人看護学急性期実習における看護技術の実施状況と課題	西南学院大学紀要, 18, 55~62, 2014
● 9	平山晴美	手術室見学実習の場から捉えた学生の学びと教育上の課題	日本手術看護学会誌, 9 (1), 17~20, 2013
10	板東孝枝	成人看護学実習における「手術室見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討	JNI, 11 (1-2), 51~58, 2013
11	宮嶋正子	急性期看護実習における手術室とIQJ見学実習導入の試み 学生の達成感と記述内容の分析から	和歌山県立医科大学保健看護学部紀要, 9, 23~31, 2013
12	小澤尚子	手術室実習に対する学生の満足感 実習形態による比較	日本手術看護学会誌, 9 (1), 50~52, 2013
● 13	宮武陽子	看護基礎教育カリキュラム改正前後の成人看護学実習(急性期)における学生の学びの比較	足利短期大学研究紀要, 32 (1), 105~111, 2012
14	米田弥里	手術室に来る看護学生の効果的な指導の取り組み 臨床指導者としての役割	日本手術看護学会誌, 8 (1), 45~47, 2012
15	板東孝枝	手術室患者を対象とした成人看護学実習における手術室での学生の学習経験	日本看護学教育学会誌, 22 (2), 13~25, 2012
16	砂賀道子	成人看護学実習Ⅰにおける手術室見学の形態と教育的サポートに関する研究	高崎健康福祉大学紀要, 11, 111~121, 2012
● 17	嶋崎昌子	手術室見学実習における学習内容の分析 見学レポートの記述から	松本短期大学研究紀要, 21, 59~67, 2012
● 18	池田奈未	手術室実習における看護学生の学び	日本赤十字広島看護大学紀要, 12, 71~78, 2012
19	石田順子	成人看護学実習Ⅰにおける手術室実習前後の不安に関する研究	高崎健康福祉大学紀要, 11, 81~90, 2012
20	中井夏子	手術見学実習における看護学生の不安感と唾液アミラーゼ活性に関する調査 診療科による相違	オペナーシング, 27 (11), 1232~1236, 2012
● 21	石橋結美	成人看護実習の手術見学における看護学生の目標と学び	島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 5, 211~219, 2011
22	水谷湖美	手術室実習における学生と看護師の目標達成に対する意欲と評価の相違	日本手術看護学会誌, 7 (1), 15~19, 2011
23	水谷湖美	手術室実習における学生・実習指導看護師の達成感に関連する要因	日本手術看護学会誌, 7 (1), 10~14, 2011
● 24	赤石三佐代	成人看護学実習(急性期)の学生の学びと実習目標との関連の検討	足利短期大学研究紀要, 30 (1), 17~22, 2010
● 25	石橋結美	成人看護実習の手術見学における看護学生の学び	島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 4, 81~89, 2010
● 26	堀越政孝	手術室見学実習における学びの内容 術中レポートの分析	群馬保健学紀要, 30, 67~75, 2010
● 27	赤石三佐代	手術室実習における看護とその根拠の学び 学生のレポートより	足利短期大学研究紀要, 30 (1), 23~27, 2010
● 28	原元子	学生の参画型実習における周手術期実習での学び 手術室看護に関する学び	共創館誌, 4 (2), 39~47, 2009
29	板東孝枝	受け持ち患者の手術見学実習をより効果的にするための学習環境調整に関する研究	日本手術看護学会誌, 5 (1), 39~42, 2009
30	小川淳子	急性期看護学実習における有効なチェックリストの作成とその運用についての研究	帝京平成看護短期大学紀要, 19, 15~19, 2009
● 31	北村直子	手術室実習を通して学生が考察した「手術療法を受ける人とその家族への看護のあり方」	岐阜県立看護大学紀要, 7 (2), 39~46, 2007
32	廣井真美	臨地における急性期看護学実習に必要な技術の習得を考える 技術チェックリストを分析し次年度に向けて検討する	帝京平成看護短期大学紀要, 17, 37~44, 2007
33	溝部佳代	周手術期看護学実習における手術室実習の有効性 学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より	看護総合科学研究会誌, 10 (1), 3~14, 2007
● 34	大谷則子	手術室見学実習における学び 二つの実習形態の比較検討による考察	オペナーシング, 21 (6), 662~672, 2006
35	細川つや子	成人看護実習での学生の学び 到達目標との関連に焦点をあてて	吉備国際大学保健科学部研究紀要, 10, 63~68, 2005
● 36	原嶋朝子	周手術期看護実習の手術見学における看護学生の学習内容	日本看護学会論文集:成人看護Ⅰ, 34, 12~14, 2004
● 37	北村直子	手術室実習を通しての学生の学び(第2報) 学生が捉えた手術室で行われていた看護	岐阜県立看護大学紀要, 4 (1), 92~98, 2004
38	吉井美穂	周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化	富山医科薬科大学看護学会誌, 5 (2), 103~107, 2004
● 39	奥村美奈子	手術室実習を通しての学生の学び	岐阜県立看護大学紀要, 3 (1), 89~94, 2003
40	高橋由起子	手術室入室オリエンテーション用QAI教材の開発とその学習効果 成人看護学実習生を対象として	臨床看護, 29 (11), 1670~1676, 2003
41	河原田米子	手術中の患者の看護に関する臨地実習の実態 学生の自己評価とアンケートの分析を通して	オペナーシング, 17 (1), 119~125, 2002
● 42	目黒恵子	手術室実習における指導体制と指導方法の検討	オペナーシング, 16 (9), 1010~1013, 2001
● 43	酒井明子	周手術期看護における見学と実習のレポート内容分析による学習効果の検討	福井医科大研究雑誌, 1 (2), 313~325, 2000

文献番号・・・□は質的研究および量質併用、●は実習記録およびレポート課題をもとに分析した論文 *著者名は筆頭者のみ記載

(7.4%)，技術チェック表および観察評価表3論文(5.6%)，観察法1論文(1.9%)，STAIを用いた心理学的手法3論文(5.6%)，唾液アミラーゼ活性を用いた生理学的手法1論文(1.9%)，その他の尺度1論文(1.9%)であった(表2)。

5. 手術室看護実習の目標，手術室看護実習の形態，手術室看護実習の指導状況，手術室実習の期間

手術室看護実習の目標が記載されていたものは28論文(65.1%)であり，全体の7割弱であった。手術室看護実習の形態(重複集計)は，「受け持ち実習」が24論文(48.0%)，受け持ち実習ができない場合は「受け持ち患者以外の患者に依頼」するが7論文(14.0%)，「手術室実習」が10論文(20.0%)，「受け持ち実習と手術室実習の両方」が7論文(14.0%)，「記載なし」が2論文(4.0%)あ

った。手術室看護実習の指導状況(重複集計)は，「指導者による指導」が29論文(55.8%)，「教員が入室前にオリエンテーションを行う」が9論文(17.3%)，「必要時教員が手術室へ入室し指導する」が1論文(1.9%)，「記載なし」が13論文(25.0%)であった。「手術室看護実習の期間」が記載されていたものは17論文であり，最も多かった期間は「1日」と「2日」でともに4論文(23.5%)であった(表2)。

6. 学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容の分類

対象43論文(論文番号1~43)による研究内容は5つに分類された。最も多かったのは，【手術室看護実習における学生の学びの実態】の25論文(58.1%)であった。順に，【手術室看護実習の実習目標と学習成果との関連】の9論文(20.9%)，【工

表2. 対象論文の概要

項目	内訳	n (%)	項目	内訳	n (%)
対象		43(100.0)	筆頭著者		43(100.0)
	看護系大学の学生	23(53.5)		看護系大学教員	24(55.8)
	看護系短期大学の学生	15(34.9)		看護系短期大学教員	13(30.2)
	看護師養成所3年課程の学生	2(4.7)		手術室看護師	4(9.3)
	手術室看護師と看護系大学の学生	3(7.0)		看護専門学校教員	2(4.7)
手術室看護実習の目標		43(100.0)	研究方法		43(100.0)
	記載あり	28(65.1)		質的研究	24(55.8)
	記載なし	15(34.9)		量的研究	14(32.6)
				質量併用	5(11.6)
手術室看護実習の入室形態 (重複回答)		50(100.0)	研究デザインの種類		43(100.0)
	受け持ち実習	24(48.0)		因子探索研究	24(55.8)
	受け持ち以外の患者に依頼	7(14.0)		関係探索研究	19(44.2)
	手術室実習	10(20.0)			
	受け持ち実習と手術室実習の両方	7(14.0)	データ収集方法 (重複回答)		54(100.0)
	記載なし	2(4.0)		実習記録・レポート	21(38.9)
手術室看護実習の指導状況 (重複回答)		52(100.0)		独自の質問票	15(27.8)
	指導者による指導	29(55.8)		面接法	5(9.3)
	教員が入室前にオリエンテーションを行う	9(17.3)		質問票の自由記述	4(7.4)
	必要時教員が入室し指導する	1(1.9)		技術チェック表・観察評価表	3(5.6)
	記載なし	13(25.0)		観察法	1(1.9)
手術室実習の期間		17(100.0)		心理学的手法	3(5.6)
	半日	3(17.6)		生理学的手法	1(1.9)
	1日	4(23.5)		その他の尺度	1(1.9)
	2日	4(23.5)			
	その他	3(17.6)			
	記載なし	3(17.6)			

表 4. 学生が経験した手術室看護実習の様相

記録単位 n=701

コード	サブカテゴリ	カテゴリ
外回り看護師と器械出し看護師の役割の違いを理解する 手術室看護師の役割を理解するのに役立つ 厳重な無菌操作の理解する 患者模擬体験によって手術を受ける患者を理解する 体験することによって出血ガーゼのカウントを理解する 手術室で用いられる薬剤を理解する 臓器を直視することで解剖生理の理解が促進する 手術室の特殊な構造を理解する 医療技術の進歩を実感する 人間の生命を守る重みと責任を理解する 倫理的姿勢をもって患者に接することを理解する 術前・術中・術後へと看護が継続していることを理解する 手術時間と手術侵襲の関連を理解する 直視することで手術侵襲の理解が促進する 周手術期看護を理解する 手術を直視することでイメージできる 看護過程の展開に役立つ 手術室看護への興味・関心を抱く 実習の内発的動機を高める動機となる 実習の事前学習を促進する資力となる 手術看護技術を体験することは難しい 患者へのプライバシー配慮に欠ける医療者の態度は問題である 手術中の医療者の不真面目な態度は問題である 患者の異常の早期発見のために、常に観察しその都度報告している 患者の状態把握(術前・術中・術後)し、適切な看護を提供できるようにしている 合併症予防のために頻回に観察を行っている 万が一の急変時に備えて行動している 薬剤・器具類の管理をしている 手術室内の環境の整理を行っている 術中記録と申し送りを行っている 手術室内の医療スタッフの連携・調整の役割を行っている 手術患者の不安を軽減する関わりを行っている 体内へのガーゼ・器械の遺残を予防している 手術進行止めない技術を提供している 手術野の無菌状態の厳守・徹底をしている 効率の良い確な器械出しを行っている 状態を把握するためにアセスメントし、看護を提供している 手術侵襲によって起こりうる状況を予測している 低体温予防の看護技術を提供している 深部静脈血栓予防の看護技術を提供している 褥瘡・神経障害予防の看護技術を提供している 体内へのガーゼ・器械の遺残の予防をしている 患者の誤認予防をしている 環境整備をして、医療者の転倒や不潔を防いでいる 感染予防に留意している 手術室は清潔を維持できる構造となっている 無菌管理を徹底している 医療チームが連携することで安全な環境を提供している プライバシーの配慮した看護を提供している 患者にリラックスできる環境を提供している 患者に丁寧な声かけを行っている 患者中心の看護を提供している 不安緩和への支援を行っている 安全・安心の手術提供を行っている 覚醒時の患者の看護を提供している 術後終了時のねぎらいの声をかけている	実習を経験することによって 手術看護の理解が促進する	手術室看護実習の 目標達成に 向けて経験した 肯定的な学習 内容と課題
手術を直視することによって 手術侵襲の理解が促進する	受け持ち患者の手術を見学することによって 理解が促進する	
手術室看護実習を効果的にするために資料を活用する	手術室看護実習の学習課題がある	
手術室における倫理的課題がある		
外回り看護師から提供される 看護実践を理解する		手術室看護師が 患者の状態を予 測し、看護判断 から提供される 看護実践に 関する学び
器械出し看護師から提供される 看護実践を理解する		
根拠に基づいた迅速なアセスメントと 異常の早期発見を行っている		
合併症予防のために看護を実践している		
厳重な安全管理を行っている		
厳重な清潔管理を行っている		
チーム医療の連携によって安全環境を提供している		
不安緩和に向けた援助/安楽な環境を提供している		
専門的知識に裏づけられた能力がある		
手術室看護師には専門的な技術・能力がある		
予測されること、何か起きたときに 機敏に対応する能力がある		
根拠に基づいた迅速なアセスメントと 対処する能力がある		
患者の安全性を保証する能力がある		手術室で行われ ている看護現象 への専心によっ て、より深化す る手術室看護の 独自性への理解
医療器具の管理と理解力がある		
チーム医療の連携・調整する能力をもっている		
患者の気持ちを支える/患者・家族の心理的支援 ができる		
質問やケアへの参加によって達成感を抱く		
実習で経験した不安や悩みに対処してほしい		学生が手術室看護 実習の目標を 達成する過程で 経験した困難と 達成感

進する資料] となるため、〈手術室見学実習を効果的にするために資料活用する〉があった。一方〈手術室看護実習の学習課題がある〉は〔手術看護技術を経験することは難しい〕や、〈手術室における倫理的課題がある〉は手術中に医療者がとった〔患者へのプライバシー配慮に欠ける医療者の態度は問題がある〕などが挙げられた。

2) 【手術室看護師が患者の状態を予測し、看護判断から提供される看護実践に関する学び】

このカテゴリは、33コード、8サブカテゴリからなり、学生は〈外回り看護師から提供される看護実践を理解する〉には〔患者の状態把握（術前・術中・術後）し、適切な看護を提供できるようにしている〕、〔万が一の急変時に備えて行動している〕、〔合併症予防のために頻回に観察を行っている〕などの看護実践を挙げていた。また〈器械出し看護師から提供される看護実践を理解する〉には〔手術進行を止めない技術を提供している〕、〔手術野の無菌状態の厳守・徹底をしている〕などと捉えていた。さらに、手術室看護師は〈根拠に基づいた迅速なアセスメントと異常の早期発見を行っている〉ため〔手術侵襲によって起こりうる状況を予測している〕こと、〈合併症の予防のための看護を実践している〉では、患者の合併症予防のために〔低体温予防の看護技術を提供している〕や〔深部静脈血栓予防の看護技術を提供している〕と捉えていた。手術を受けている患者に対し〈厳重な安全管理を行っている〉では、〔体内へのガーゼ・器械の遺残を予防している〕や〔患者の誤認予防をしている〕など、医療事故防止の看護実践を挙げていた。また〈厳重な清潔管理を行っている〉では〔感染予防に留意している〕ことや〔無菌管理を徹底している〕などを挙げていた。手術を受ける患者への〈不安緩和に向けた援助／安楽な環境を提供している〉から〔患者中心の看護を提供している〕や〔安全・安心の手術の提供を行っている〕など、手術室で行われている手術看護の看護実践が挙げられていた。

3) 【手術室で行われている看護現象への専心によって、より深化する手術室看護の独自性への理解】

このカテゴリは、22コード、8サブカテゴリからなっていた。学生は、手術室で手術看護を見学し、手術看護を提供する手術室看護の独自性があ

ると捉えていた。手術看護には〈専門的知識に裏づけられた能力がある〉ことを挙げ、〔手術看護師は手術看護に必要な専門的な知識と技術をもって行動している〕、〔手術室看護師は手術全体の流れと麻酔や手術方式を熟知して行動している〕と捉えていた。さらに〈手術室看護師には専門的な技術・能力がある〉と捉え、〔手術室看護師には体力と精神力が必要である〕、〔手術室看護師には責任感・集中力のある行動が求められる〕などを挙げていた。また〈予測されることと、何か起きたときに機敏に対応する能力がある〉に対しては、手術室看護師の〔機敏な行動〕と〔柔軟な判断〕を挙げ、手術室看護師は〈根拠に基づいた迅速なアセスメントと対処する能力〉を用いて〔手術により予測される合併症を回避するためのアセスメントと対処する能力が必要である〕と捉えていた。〈患者の安全性を保証する能力がある〉には、〔医療安全を徹底（誤認防止・ガーゼの遺残）した看護を提供できる〕こと、〈チーム医療の連携・調整する能力をもっている〉には〔チーム医療によって患者により良い医療を提供している〕、〔スタッフの調整・連携を行う能力がある〕などと捉えていた。そして〈患者の気持ちを支える／患者・家族の心理的支援ができる〉は、手術を受ける〔患者の不安を軽減する関わりができる〕、〔家族の援助の必要性を理解しケアを提供できる〕を挙げていた。

4) 【学生が手術室看護実習を目標達成する過程で経験した困難と達成感】

このカテゴリは、9コード、2サブカテゴリからなっていた。学生は、手術看護学実習で〈質問やケアの参加によって達成感を抱く〉は、〔看護師から配慮があり、質問やケア・処置への参加ができた〕を挙げていた。一方で〈実習で経験した不安や悩みに目を向けてほしい〉には〔慣れない環境であり看護師が忙しそうなか、学生が聞ける雰囲気ではない〕、〔手術室における看護師の役割・術式・手術内容や経過・器具等を教えてほしい〕、〔教員と指導者の連携を密にしてほしい〕などが挙げられていた。

考察

1. 学生の手術室看護実習に関する看護研究の動向
わが国における看護基礎教育課程の手術室看護実

習に関する研究は、2009年を境に僅かに増加傾向にあった。これは、厚生労働省が2003年に発令した「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」¹⁰⁾や、2009年の看護基礎教育のカリキュラム改正が影響しているものと考えられる。このカリキュラム改正では、学生の看護実践能力の強化が重要課題として、看護師の教育課程で習得すべき技術項目の精練や卒業時の到達目標を明確にしていることから、これを受けて手術室看護実習の技術内容や学習内容に対する関心が高まったものと考えられる。加えて、わが国における看護系大学が2000年の84校から2015年1月には249校¹¹⁾と増加するに伴い研究者でもある大学教員数が増加したことから、大学に所属している研究者によって看護系大学の学生を対象とした研究が行われ、これが研究数の増加の一因となっていると考えられる。

2. 研究の種類、研究デザインおよびデータ収集方法

研究の種類は質的研究(55.8%)が最も多く、研究デザインでは因子探索研究(55.8%)が最も多く占めていた。本研究の対象論文の大部分が学生の実習記録やレポート類(38.9%)を用いて質的データとして分析していたことから、因子探索研究が多かったものと考えられる。さらに、手術室看護実習という現象を捉え、学生の実習経験があるがままに分析するには、質的研究が最も適していると考えられることから、研究デザインとして因子探索研究が半数を占めたものと思われる。因子探索研究の次に多かったのは、探究レベル2に相当する関係探索研究(44.2%)であった。関係探索研究は因子間にどのような関係があるかを探す目的で行われ、このタイプの研究によって見つけ出された因子間の関係から仮説が提示され、その真偽は、次の探究レベルである関連検証研究によって確かめられる¹²⁾といわれている。本研究の結果から研究デザインが、因子探索研究と関係探索研究のみで占められていたことから、わが国の看護基礎教育課程における学生の手術室看護実習の実態が、今までの研究の構築によって明らかになってきた段階であると判断できる。研究対象とした論文は、学生という人を対象とした研究であるため、関連検証研究や因果仮説検証研究のように、仮説を形成する因子以外の事象を出来るだけ差異やばらつきがないようにすることは、倫理的側面から難しい問題もある。しかしながら、研究成果

が実態調査に留まっている現状であり手術室看護実習の質を向上していくためにも、研究の蓄積やエビデンスのある研究が行われていくことを期待する。データ収集方法で、実習記録およびレポート類の次に多かったのは、独自の質問票(27.8%)を用いた調査であった。質問紙票は学生に負担が少ないデータ収集法であり、その方法を用いて学生の手術室看護実習の経験について、情報を収集しようとする意図で行われているものと考えられる。また質問票に自由回答の欄を加えるなど工夫することで、学生の素直な言葉からデータを収集しようとしていると思われる。研究方法の種類として、近年量的研究と質的研究の共通点を強調した混合研究法(mixed methods)が用いられる¹³⁾傾向にある。今後は量的・質的研究の混合研究法などを用いて、学生の一側面だけではなく多面的に捉える研究を進めていくことで、手術室看護実習に関する研究がさらに発展していくことが望まれる。

3. 手術室看護実習の目標、手術室看護実習の形態、手術室看護実習の期間、手術室看護実習の指導状況

「手術室看護実習目標」を記載した論文(65.1%)は全体の7割弱と多かった。このことから、看護基礎教育を行っている大部分の教育機関では、実習目標を掲げながら手術室看護実習を展開しているものと考えられる。

「手術看護実習の形態」で一番多かったのは「受け持ち実習」(48.0%)であった。これは、手術室看護実習は看護基礎教育の学生にとって専門性が高い¹⁴⁾こと、「診療に伴う看護技術」は、看護基礎教育で教育すべきことと卒後の研修等ですべきことは区別して考える¹⁵⁾と指摘されていることに加え、手術室看護実習は、小さな看護技術の提供でも無資格者の学生による医療的行為にもなり得、慎重な対応を取らざるをえないことから、「受け持ち患者」実習が選択されていると考える。「手術室看護実習の期間」で最も多かったのは「1日」と「2日」であった。これも対象とした論文の実習形態が「受け持ち実習」のみが最も多かったことが関連していると思われる。また「手術室看護実習の指導状況」では、「指導者による指導」(55.8%)が最も多く、その理由として教員が手術室内で直接指導する時間的確保が難しいことが現状として考えられる。さらに、手術看護の複雑な看護現象を教材にして指導す

るには教員に高い指導能力が求められるうえ、手術室での確かな指導をすることは困難と考えられることから、指導者による指導が多かったものと推測される。臨地実習は、講義を臨地の現象と結び付けて考える貴重な場であり、臨地実習そのものが「授業」として位置づけられている¹⁶⁾ことをふまえると、教員不在の手術室看護実習は、「授業」として難しい側面があるといえる。教員が手術室看護実習をどのように捉えているのか、また実習担当教員が学生の学習状況をどのように把握し実習を進行しているのか、実習指導の実態と教授活動の解明が必要と考える。

しかしながら、これらの上記項目について論文中に記載がないものがあつたことから、手術室看護実習を取り上げている論文であるものの、研究の枠組みにおける説明が不十分であるため、記載による説明が必要と考える。

4. 学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容の分類

手術室看護実習に関する研究内容を検討した結果、【手術室看護実習における学生の学びの実態】を明らかにした研究(58.1%)が全体の約6割を占めていた。これは、手術室看護実習は教員が直接関わるのが少ない看護学実習でもあるため、学生が何を学んでいるのか、教員や指導者が実態を把握する目的で研究が行われているのではないかと推測される。本研究は水谷ら¹⁷⁾の論文の表題から目的を分析した結果も「学生の学び」に関するものが最も多く、先行研究と一致するものであつた。

次に多かったカテゴリは、【手術室看護実習の実習目標と学習成果との関連】(20.9%)であつた。看護学実習における研究の動向を調査した先行研究¹⁸⁾によると、看護学実習における学生の目標達成度や自己評価および目標達成度に関わる要因を解明した研究が22.5%であつたという結果と類似していた。本研究の研究対象とした論文の筆頭研究者の割合は、大学および短期大学所属の教員を併せて86.0%である。このことから、教育者として看護学実習に対する評価への関心の高いことが予想され、そのため実習目標と学習成果に着目した論文数が多かつたのではないかと考える。本研究の対象論文は、教員が授業を評価するという視点が色濃く表れていた。看護学実習の評価は、学生の学習成果に関わる評価と教員の教授活動の評価という二つの側面がある¹⁹⁾

といわれている。このことから、今後は教員の教授活動の評価の側面からも研究が行われることが望まれる。

【工夫を取り入れた教授方略による手術室看護実習の学習効果】(9.3%)は、手術看護は専門性が高いといわれていることから、手術室看護実習を学びやすいように教材等を工夫し、学生の学習の理解を支援することに着目した論文である。これらの論文から、より質の高い教育を実践するために努力している姿勢が伝わってくるものであり、今後も学生の学習促進のための教育的な研究が行われていくことが望まれる。

残るカテゴリ【手術室看護実習が学生に及ぼす影響】(9.3%)は、手術室看護学実習そのものが対象である学生にとって強い緊張とストレスをもたらすことから、学生の心理的側面の問題を克服するためのサポートおよび配慮した教授活動の必要性を示している。しかし、その援助法はいまだ明らかになっていないことから、今後、手術室看護実習の学生の影響要因に対する指導や援助について検討していく研究が求められる。

2000～2015年間の15年間で発表された、学生を対象とした手術室看護実習に関する研究論文は43件であり、毎年5件前後で推移している。研究対象の約5割を占めていたのは実習記録およびレポート課題をもとに分析した論文であることから、研究内容は実態報告に留まっており一般化をねらうような段階に至っていない。したがって、現時点では学生の手術室看護実習に関する研究は萌芽的な状態といえるが、発表論文は少しずつ増えていることから研究は進展していると考えられる。

5. 学生が経験した手術室看護実習の様相

学生が経験した手術室看護実習の様相で形成された4つのカテゴリについて述べる。

【手術室看護実習の目標達成に向けて経験した肯定的な学習内容と課題】では、学生が手術室看護実習の目標に向けて学習している内容と課題が挙げられた。看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基に、クライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた看護現象を教材として、看護実践に必要な基礎的能力を修得するという実習目標達成を旨とする授業である²⁰⁾といわれている。手術室看護実習を経験することによって対象理解が深まり、手術を受ける対象に対して必要な看

護への関心とつながっていく学習過程をふんでいくと捉えられる。しかしながら課題もあり、患者が生命をかけて外科的治療を受けている場面でかわされる医療従事者の何気ない態度が、学生にネガティブな感情を与えて学習へのモチベーションを妨げていることが挙げられていた。医療者は患者のプライバシーを守ることと患者を擁護する立場にあることから、今後改善を要する課題と捉えられる。

手術室で行われている看護技術は主に「診療に伴う看護技術」である。侵襲を伴う看護技術に対して、看護基礎教育で教育すべきことと卒後の研修等ですべきことは区別して考える²¹⁾ことが指摘されている。しかし、手術看護技術を体験する難しさについて、基礎教育期間において自立して経験できる技術が決して多いとはいえず、経験できる技術の種類も限定されていた²²⁾と述べている論文もある。近年の論文では、手術室看護実習における技術の経験を優先よりも、手術室でより多くのものを観察することに主眼をおいた論文も見受けられる²³⁾。手術室看護実習は限られた時間であり、その実習における看護援助について、実施が望ましいのか、または見学のみとするのか、到達目標の設定は教育機関によって捉え方が一様とはいえない状況であった。このことから、手術室見学実習で提供されている看護援助を実施する意味や範囲について、今後教育的な側面からも研究を積み重ねていくことが求められる。

【手術室看護師が患者の状態を予測し、看護判断から提供される看護実践に関する学び】では、学生が手術室看護実習の経験から手術室内で行われていた看護に着目したものであり、手術室看護師の看護実践が詳しく抽出されていた。雄西らは、手術室看護師は、手術侵襲、麻酔の生体への環境を熟知し、患者の身体的安全・安楽が得られ、不安や恐怖心が軽減することにより精神的安楽が得られることを目標に看護を行っている²⁴⁾と述べている。本研究で抽出されたコードから、学生は授業で既習している内容を理解し実習に臨んでいたものと捉えられる。

【手術室で行われている看護現象への専心によって、より深化する手術室看護の独自性への理解】では、学生は手術室で行われていた手術看護をじっくりと観察し、卓越した看護を提供していたと捉えていた。土蔵は、手術は治療目的で患者に生命の危機を及ぼすような大きな侵襲が加わるため、実践する技術は洗練されていなければならない。特に感染予

防技術と安全の確保、麻酔に関する知識と介助技術は、手術室独自の技術といえ、高い専門性が求められる²⁵⁾と述べている。学生は看護基礎教育では専門性の高い領域といわれている手術室看護実習であるが、手術室看護の独自性を理解し学んでいたことを示している。

【学生が手術室看護実習を目標達成する過程で経験した困難と達成感】では、手術室という閉鎖された空間の中で、学生が手術室看護実習の目標を達成する過程で経験した困難や達成感を感じたことが挙げられていた。学生は手術室看護実習では外回り看護師もしくは臨床指導者から最も多く指導を受けていることから、直接指導を受ける実習指導者との関係性を構築することに困難を感じていたものと考えられる。千田ら²⁶⁾の成人看護学実習における学生の抱える困難感を文献によって検討した論文では、対人関係の側面として実習指導者との関係を挙げており、学生は年配者と接する機会が減少傾向にあり、加えて受け持ち患者は基礎看護学実習の時と比べ複雑な状況下にある可能性が高く、実習指導者との関係性を構築する上で困難感を抱いていたと述べている。岩永ら²⁷⁾は、精神的に不健康とされる学生は全体の3割以上であり、その関連因子の一つに実習のストレスを挙げ、学生に対する情緒的サポート体制の必要性を述べている。しかしながら、本研究では手術室看護実習における困難感やストレスを抱えている学生に対する教授法やサポート体制について検討した論文は見当たらなかった。今後、手術室看護実習に伴う困難やストレス状況に対し、学生はどのような支援を得ているのか、学生のストレス要因と対処の因果関係について、検討する必要性が示唆された。

本研究では、学生から手術室看護実習における指導に対し、肯定的・否定的な捉え方が示された。佐藤ら²⁸⁾は、実習指導者は学生との関係形成には時間的制約が避けられないことから、実習指導者の実習環境の整備と学生への心理的サポートという役割は状況により責任の度合いが一様ではないことを示唆している。手術室看護実習の場合は1日か2日という短い期間で行われている状況であり、短時間で指導者との関係性を構築するのは学生にとって難しい側面があると推測される。このことから、指導者間の連携を密にし、学生の実習場のニーズに関して教員と指導者が共に問題解決していく姿勢が不可欠

であることを示している。しかしながら、本研究からは指導者と教員の連携に関する研究は見当たらなかった。看護基礎教育課程の実習を対象とした研究では、教員と指導者との連携は必要とする論文は数多く報告されている^{29) 30) 31)}。手術室看護実習が他の実習と違って看護基礎教育では専門性が高いという見方があること、手術室内での実習指導は主に手術室看護師が行っている現状をふまえ、指導者と教員の連携に関する研究を行っていく必要がある。中田ら³²⁾は、教員が実習に関わることが少ないことから、指導者からは戸惑いや不満が挙げられていた問題に対し、実習指導を終えた時点で教員と指導者のリフレクションを行うことで、実習指導者、教員双方の理解が深まる効果が期待できる見方を示している。この試みは母性看護学実習における報告であるが、手術室看護実習においても教員と実習者の連携を強化し、効果的な教育方策を探究していくことの必要性が示唆された。

6. 今後の研究課題

学生を対象とした手術室看護実習に関する研究内容の分析結果から、最も多かった【手術室看護実習における学生の学びの実態】のカテゴリが示すように、学生の実習記録やレポートをデータとして分析しているものや、手術室看護実習を実態調査するという研究方法に偏りが生じている現状が浮き彫りにされた。今後は研究目的に見合った研究方法を活用すること、多様な研究方法を用いて研究を行い導き出された内容の検討から、関係探索、関連検証、因果仮説検証研究に発展させていくことが課題といえる。

さらに、研究内容の分析から導き出された【手術室看護実習が学生に及ぼす影響】のカテゴリや、学生が経験した手術室看護実習の様相の【学生が手術室看護実習を目標達成する過程で経験した困難と達成感】のカテゴリから、手術室看護学実習は学生にとって強い緊張とストレスをもたらしていることが示された。しかし、実習のストレスに対する学生自身の対処や学生の心理的側面の問題への援助法は明らかにされていない。また、手術室看護実習は教員不在のまま実習を展開している場合があり、「授業」という視点からは課題がある。これらから今後必要とされる研究は、学生の手術室看護実習に対するストレスを軽減する教授法や援助、実習担当教員における学生指導の実態と教授活動、教員と指導者側の支援・連携についての研究を進めていく必要性があ

ると考える。

本研究の限界

本研究の限界は、対象論文の検索時に本研究の目的に合致する論文が検索されなかった可能性がある。また、内容を分析するカテゴリ化において十分な検討を行ったが、研究者の主観的判断が多少なりとも含まれていることが考えられ、これらの点が本研究の限界である。

結論

2000～2015年までに国内で報告された看護基礎教育課程における看護学生の手術室看護実習に関する研究の動向と課題に焦点をあてて分析し、以下の結論を得た。

1. 研究デザインは、因子探索研究が55.8%、種類は質的研究が55.8%と最も多く、手術室看護実習の指導状況では「指導者による指導」(55.8%)が最も多かった。
2. 「研究内容」は5分類され『手術室看護実習における学生の学習内容の実態』(58.1%)が最も多かった。
3. 「学生が経験した手術室看護実習の様相」は4分類され、【学生が手術室看護実習を目標達成する過程で経験した困難と達成感】では、学生が手術室看護実習の目標を達成する過程で経験した困難や達成感や、指導に対して肯定的・否定的に捉えていた。
4. 研究の動向は43論文発表され、毎年5件程度発表されてはいるものの、学生の実習記録やレポートをデータとして分析しているものや、手術室看護実習を実態調査している研究が大部分を占めていることから、研究は萌芽的な段階といえる。
5. 今後必要とされる研究は、手術室看護実習に対する学生のストレスが強いことから学生のストレスを軽減する教授法や援助法の確立、手術室看護実習における実習担当教員による教授活動の解明、教員と指導者側の支援・連携の検討が挙げられる。

引用文献

- 1) 雄西智恵美, 秋元典子. 周手術期看護論. 第14版. 東京: スーヴェルヒロカワ; 2014.
- 2) 北村直子, 奥村美奈子, 兼松恵子, 田中克子,

- 小田和美他. 手術室実習を通しての学生の学び
第2報 一学生が捉えた手術室で行われていた看護— 岐阜県立看護大学紀要 2004 ; 4 (1) : 92-98.
- 3) 河原田栄子, 岸野亜矢, 川城由紀子, 松浦さおり. 急性期(周手術期)看護における実習指導の実際. 看護展望 2001 ; 26 (11) : 23-29.
- 4) 原嶋朝子, 加藤千恵子, 鈴木夕岐子, 浅見多紀子, 柴崎いづみ他. 周手術期看護実習の手術見学における看護学生の学習内容. 日本看護学会論文集成人看護 I 2004 ; 34 : 12-14.
- 5) 深澤佳代子. 看護基礎教育から見た手術室看護の専門性. 日本手術医学会誌 2004 ; 25 (1) : 83-85.
- 6) 水谷郷美, 城丸瑞恵. 国内文献からみた手術看護教育における研究動向—看護基礎教育に焦点を当てて—. 日本手術看護学会誌 2015 ; 11 (2) : 278-284.
- 7) 看護行政研究会. 平成27年度版 看護六法. 初版. 名古屋 : 新日本法規 ; 2015.
- 8) 舟島なをみ. 看護学教育における授業展開 質の高い講義・演習・実習の実現に向けて. 初版. 東京 : 医学書院 ; 2013.
- 9) 勝又浜子, 門脇豊子, 清水嘉与子, 森山弘子編. 看護師養成所の運営に関する指導要領について, 看護法令要領(平成27年度版). 東京 : 日本看護協会出版会 ; 2015.
- 10) 厚生労働省. 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書 : 2003年3月17日. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03s0317-4.html> (2015年1月29日閲覧)
- 11) 一般社団法人 日本看護系大学協議会. 「大学で看護を学ぼう」リーフレット : 2016. <http://www.janpu.or.jp/download/pdf/janpu-kango.pdf> (2015年12月15日閲覧)
- 12) 数間恵子, 岡谷恵子, 河正子. 看護研究のすすめ方読み方つかい方. 2版. 東京 : 日本看護協会出版会 ; 2014.
- 13) 廣瀬春治次. 混同研究法の現在と未来. 山口医学. 2012 ; 61 (1・2) : 11-16.
- 14) 深澤佳代子. 看護基礎教育における手術室看護の位置づけと教授方法について—手術室実習について—. 手術医学. 2006 ; 27 (4) : 83-85.
- 15) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 : 2007年4月16日. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2015年1月29日閲覧)
- 16) 杉森みどり. 舟島なをみ. 看護教育学. 第5版. 東京 : 医学書院 ; 2012.
- 17) 前掲書6)
- 18) 山下暢子, 定廣和香子, 舟島なをみ. 1994年から1998年における看護学実習に関する研究内容の分析—学生を対象とした研究に焦点をあてて—. 看護教育学研究. 2003 ; 12 (1) : 29-36.
- 19) 前掲書16)
- 20) 舟島なをみ. 看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題. Quality Nursing. 2001 ; 7 (3) : 6-7.
- 21) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 : 2007年4月16日. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf> (2015年1月29日閲覧)
- 22) 木村久恵, 村井嘉子, 牧野智恵, 丸岡直子, 岩城直子他. 成人看護学実習における看護技術修得状況の実態. 石川看護雑誌. 2011 ; 8:73-82.
- 23) 板東孝枝, 雄西智恵美, 今井芳枝, 山田和代, 森恵子ほか. 成人看護学実習における「手術見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討. The Journal of Nursing Investigation. 2013 ; 1, 2 : 51-58.
- 24) 前掲書1)
- 25) 土蔵愛子. 手術看護に見る匠の技. 初版. 東京 : 東京医学社 ; 2012.
- 26) 千田寛子, 堀越政孝, 武居明美, 越井英美子, 恩幣宏美他. 成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析. 群馬保健学紀要. 2011 ; 32 : 15-22.
- 27) 岩永喜久子, 後藤有紀, 宮澤晴佳, 増本紘子. 学部教育における看護学生のメンタルヘルスと関連要因. 保健学研究. 2007 ; 20 (1) : 39-48.
- 28) 佐藤亜月子, 城野美幸, 吉田千鶴. 看護基礎教育における看護基礎看護学の技術教育に関する研究の動向—2003~2012年に発表された国内の研究論文の分析—. 帝京科学大学紀要. 2014 ; 10 : 201-206.
- 29) 堀理江, 大塚眞代. 成人看護学領域における実習指導者の指導観. ヒューマンケア研究学会誌. 2013 ; 5 (1) : 19-26.

- 30) 榊原文, 小笹美子, 福岡理栄. 地域看護学実習者における学習効果を高めるための指導工夫. 島根大学医学部紀要. 2016 ; 38 : 55-61.
- 31) 三木香代子. 成人看護学実習において学生が体験する困難—卒業生アンケート調査を基に—. 千葉県衛生短期大学紀要. 2007 ; 26 (1) : 77-88.
- 32) 中田恵美, 恵美須文枝, 緒方京, 下睦子. 分娩介助実習を担当する臨床指導者の実態 (第3報) —実習担当に対する意義と課題—. 母性衛生. 2015 ; 56 (2) : 282-291.
- (2016年4月4日受付, 2016年8月22日受理)

<Material>

Operating Room Nursing Practicums in basic Nursing Education Courses: the Direction and Future areas of Research in Japan (2000–2015)

Naoko Ozawa

Faculty of Nursing, Iwate Prefectural University

Objective: To analyze the direction of nursing research regarding operating room nursing practicums for student nurses during basic nursing education courses and to investigate necessary future areas of research in Japan.

Methods: The Web Japan Medical Abstracts Society (Ver.5) was searched for articles published between 2000 and 2015 regarding operating room nursing practicums for student nurses. Values for descriptive statistics were calculated for type of research and other details while “research content” and “aspects of operating room nursing practicums experienced by students” were categorized based on similarity of semantic content.

Results: Among the 43 relevant articles returned by the search, the most common research design and type of research were exploratory factor analysis (55.8%) and qualitative research (55.8%), respectively. The most common form of instruction for operating room nursing practicums was “instructions from an instructor” (55.8%). Research content was divided into five categories, the most common of which was field reports describing “the state of student learning content during operating room nursing practicums” (58.1%). “Aspects of operating room nursing practicums experienced by students” were divided into four categories, among which “difficulties and sense of achievement experienced by students during the process of target attainment during operating room nursing practicums” demonstrated the difficulties and sense of achievement experienced by students during the process of attaining the targets of operating room nursing practicums and positive and negative perceptions of instruction.

Conclusion: The direction of current research regarding operating room nursing practicums for nursing students is at a breakthrough stage following clarification of the state of current operating room nursing practicums. Further research is required regarding 1) pedagogy and support to reduce student stress, 2) the state of student instruction and practicum systems among teachers in charge of practicums, and 3) support and cooperation between teachers and practicum instructors.

Keywords: basic nursing education course, operating room nursing practicum, literature review